- 1 派遣期日 令和5年 12月 15日(金)
- 2 派遣先 学校名 横浜国立大学教育学部附属横浜小学校
所在地 神奈川県横浜市中区立野64
<https://yokosyo.ynu.ac.jp/>
- 3 研修内容

○研究主題 「未来を拓く子～感性をはたらかせ材と人とかかわる～」

「子どもは自ら学ぶ力をもち、前向きに追及・探求していく能動的な存在である」という理念のもと、子どもにとって本当に必要な学びとは何かを追求した研究である。予測不可能な社会において、AIのシンギュラリティに脅かされる中で、一般的な解決方法や論理を基盤とした判断ではなく、感性をはたらかせた判断によって主体的に生きることが求められている。感性こそが人としての強みである、ということの研究主題の軸に据えられている。

【未来を拓く子の定義】

- ・ 科学技術の発展により、価値観が多様化し、予測することが難しい時代に「感性」をはたらかせ、多様な人々と協働しながらより良い生き方を見出していく子
- ・ 「感性」をはたらかせながら、自ら「ひと」「もの」「こと」とかかわり新たな価値や楽しさを見出すなかで、自己を開放し自分らしく生きていく子

上記の2点を「未来を拓く子の定義」とした背景には、それまで自分のしたいことよりも、他者からどう見られるのかを気にして行動してしまったり、失敗をおそれて自分の欲求の赴くままに行動することができなかつたりする児童の姿があったからである。社会常識や、固定観念にとらわれ、自らを解放することができない状態にいて、多面的、多角的なものの見方ができなくなり、ある決められた枠の中でしか自分自身も他者も評価できなくなっているという現状が示されている。

【感性の定義】

材をどう感じ、どのように受け取るのかという受動的なものだけでなく、自ら感じ動き出す能動的な価値判断も含む心のはたらき。「感受」「協働」「創造」を生み出す。

感性を大切にしたい学びを成立させるためには、理性のみに頼った知識や論理を優先した学習活動では、不十分であるとした。感性をはたらかせ、ありのままの自分で豊かな学びを実現させていくことで材や他者からなにかを「感受」する態度を高めていきたいと考えた。

昨年度までは、各教科・領域の中でどのような感性がはたらくのかを考え、感性を刺激する材・場づくりに焦点を当てた授業を展開し「感性をはたらかせる子どもの姿」を集積してきた。そして、今年度からは、感性がどのようなものかを明らかにするよりも、個が感性をはたらかせている姿とはどのような場面でみられるのか、また、感性をはたらかせる個はどのような学びを作り上げるのかを明確にすることに焦点を当てて研究を進めている。その中で、「知りたい」「やりたい」という思いを出発点に、人ひとりの独自の追求・探求が見られた。また、自ら問いを見出し、学びを深める個は、感じるままに自らの判断によって主体的に材や人とかかわろうとしていることが見えてきたと報告されている。

感性がはたらくことで感受・協働・創造という3つのはたらきが生まれると考え、それぞれのはたらきが以下のように整理されている。

- ① 感受・・・材や他者から何かを感じ取り、客観的な知識だけでなく、感じるままに自らの意思で動き出す。協働・創造の土台となる。
- ② 協働・・・材を介してかかわる他者と、協働的に新たな文化を構築しながら、共によりよさを追求する。
- ③ 創造・・・材や他者とかかわりを深めることで、新たな価値を作り出す。

感性をはたらかせ材や他者からなにかを「感受」し、自らの意思で動き出すことで「協働」が生まれる。また、他者を「協働」する中でも「感受」ははたらく。これらが相互にはたらくことで、材や他者とのかかわりが強くなり、同じ材を介して目的、目標を共有した集団の中に新たな価値が「創造」される。さらに個の中にはその「個」なりの価値観が得られ、意味を見出す。この学びのサイクルの中では常に感性がはたらか、感性が磨かれる。様々な価値を共有した学級学年の中で「個」が感性を磨き、その子らしさを発揮できる集団になることで、新たな材と出会った時に、材や他者とのより深いかかわりを生むのである。

グランドデザインの中に、①生活総合科・総合単元学習を軸に、②教科の学び、③朝の会、④学級活動、⑤学年プロジェクト、⑥異学年交流を位置づけることで、これらの学びが相互に作用し合い「未来を拓く子」をはぐくむ教育活動をつくりあげている。

4 感想

提案授業① 4年外国語科 Kobanashi～小喃で笑いを～

国語の授業で落語に触れ、その面白さを知った児童の「今度は外国語で落語をしてみたい」という思いから、この授業は生まれた。自分で考えたオチが留学生（相手）に笑ってもらえるかと試行錯誤する中で、外国語と日本語の音や単語の違いに気付き、非言語コミュニケーションも利用しながら相手に理解してもらおうとする姿が多く見られた。今回、聞き手の母語が英語と中国語であったことも面白い。相手の言語に合わせて、児童は小喃を作るため、教室に日本語・英語・中国語の3カ国語が飛び交い、お互いの言語を完全に理解できない状況で、どのように相手に理解してもらおうかという点で児童が学びを深めていたようだ。児童が一つの小喃を完成させるまでに、それぞれの言葉のエキスパート（留学生）が小喃を修正しているため、児童は十分にその言語に向き合い、吟味している。児童のメタ言語能力が自然に醸成されている。また、ジェスチャー等の非言語コミュニケーションとともに何度も小喃を練習しているため、その表現の意味やなぜその箇所が面白いのか（オチの部分）ということも自然に理解できていた。これは、今回扱った材が、顔の表情や言葉の伝え方が重要な要素になっている「落語」であったことも大きく作用している。

提案授業② 2年国語科 目指せ！言葉の名探偵

本単元で扱われた謎解き物語文のメリットは、まず、様々な言葉を手がかりに謎を解明する活動を通して、書かれた言葉の意味（意図）は何かという問いが生まれる。そして、児童が読んだ後にそれぞれ考えを持ち、個の中に「話し合いたい」「確認したい」という思いが喚起されることである。さらに、確認する中で、どのような言葉に立ち止まるとよいか、その観点（行動描写、会話文、オノマトペ、情景）に基づいて文章を読む能力、すなわち読解力が養われる、ということが言える。児童は、「謎を解きたい」「犯人が知りたい」という思いから、言葉に立ち止まり、その言葉が謎の解明につながるという根拠を、学級の友達に伝えたいという気持ちが芽生える。根拠を伝える際には、多くの友達を説得させたいため、その意見が非常に論理的であった。学級で一つの謎を共有しているため、そこに協働的な学びが生まれていた。

今回参観した授業のどちらも、児童の「知りたい」「やってみたい」という思いから、児童が問いを見つけ、それを検証し、根拠をもって自分なりの答えを導いていた。協働的な学びの中で、児童は材と深く向き合い、多角的に材を捉え、新たな価値を創り出している場面を多く参観することができた。